

2013年8月15日・週刊きたかみでは

詩集『木箱の底から—今も「ふ」号風船爆弾が飛び続ける 増補新版』

川内久栄氏 コールサック社

風船爆弾をご存知だろうか。太平洋戦争中、和紙で気球を作り、米国本土を直接空爆するための秘密兵器として「ふ」号の名前で開発した。放球台の設置は千葉の一宮、茨城の天津、福島の勿来だった。偏西風の関係で晩秋から4月までの時期に限られ、落下も不明の無差別爆弾という問題を抱えていた。

「風船爆弾」を通して、戦争と生・死、人生に影響を与え続けた深く刻まれた時代そのものを考察した川内氏は当時、女学生。女子挺身隊として風船爆弾製造に動員。決してもらしてならない機密保持が生への「呪縛」となり、詩人の人生そのものに負荷をかけ続けてきた。

「木箱」は満球試験で完成した風船をつめた箱そのものである。

これまで氏は第7詩集まで出版。7番目が「風船爆弾」についてであり、第8詩集はその増補版として44篇収録した。

解説でコールサック社の編者・発行者の鈴木比佐雄氏は「総力戦の戦争において国家がどのようなことを国民に強いたかを内側から語れる最後の生き証人であるという使命感が川内さんにはきっとあるのだろう」と示唆。風船爆弾自体を「歴史から抹殺することは、川内さんの世代の生きた時間を消してしまうことになるのだ」という危機意識があったのではないかとし、世代の思いを背負って書き記されたと説いている。

内容は、序詩、1章「風船灯籠を作る夜」2章「放球地点」、3章「終わりのない逃亡」、4章「還ってきた里道」。

氏は1931年大阪生まれの詩人。「詩は、その自分の歩みのすべてだと思っています。忘れられない最後の大阪大空襲の八月十四日を思い出し、平和を心から願いながら、この増補新版を出そうと決意」した。「震災に遭遇した東北の皆様はきっと鎮魂の風船を心の空へ飛ばしておられるでしょう」と後書きに記した。

現在は平和を象徴する風船だが、そこに忌まわしい記憶を持つ多くの世代からの告発でもある。A5版上製。定価・本体2000円＋税。一般書店で扱っている。コールサック社（TEL 03-5944-3258）

と紹介されています。